

令和 2 年 6 月 29 日現在

機関番号：17501

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2015～2019

課題番号：15K17368

研究課題名（和文）戦後初期における子どもの観察と記録を基盤とした教師の力量形成とカリキュラム開発

研究課題名（英文）Curriculum and Teacher Development through Observation and Record for Children in the Early Postwar Period

研究代表者

大島 崇 (OSHIMA, Takashi)

大分大学・大学院教育学研究科・准教授

研究者番号：70715276

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,000,000円

研究成果の概要（和文）：戦後初期における子どもに関する記録に基づく教師による研究について探究した。具体的には、学習の対象と子どもとの関係を把握する教師の専門性の自覚化、コア・カリキュラム連盟におけるワークショップの影響、カリキュラム改革による学習の観察方法や教師間の協働性の変容、問題解決学習における知識の位置づけと実践研究の質の検討、という点が明らかとなった。

また、現代的な課題として事後協議会が深まる手立てを探究した。具体的には、授業者の願いや意図の共有、子どもの姿の共有、授業中の一場面への焦点化の3点が手立てとして有効であることが示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

従来見落とされがちだった戦後初期における授業研究や教師の専門性に関する史料の検討を通して、カリキュラム開発運動の収束や学習方法論の転換に着目する一般的な視座に対し、学習の対象と子どもとの関係を把握する教師の専門性の自覚化のプロセスとして再評価するという新たな視座を提案したという点で学術的意義がある。さらに、戦後初期の問題解決学習は、子どもの実態を十分に踏まえられなかったという「研究の質」の問題により「実践の質」の検討を十分にできなかった可能性について指摘しており、従来とは異なる枠組みで「実践の質」に迫ることが求められている現在の教育実践の課題を探究する上で示唆的であり、社会的意義が認められる。

研究成果の概要（英文）：This paper examines curriculum and teacher development through observation and record for children in the Early Postwar Period. In addition, I examine the modern problem about teacher development through observation and record for children.

研究分野：教育方法学

キーワード：戦後初期 カリキュラム 教師 子ども 観察 記録 問題解決学習 実践と研究

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

(1) 本研究に関連する国内・国外の研究動向及び位置づけ

特色ある学校づくりや総合的な学習の時間の導入以降、カリキュラム開発者(研究者)としての教師の力量形成は、教育現場の課題として指摘されてきた。他方、学校内の教師の間で授業を観察し検討し合う日本の授業研究は、「研究者としての教師(teacher as researcher)」の専門性を支えるものとして世界的に注目を集めている。授業研究については、ドナルド・ショーンにより「反省的实践家」(Schön. Reflective Practitioner: How Professions Think in Action. Basic Book. 1983)という新たな専門家像を提出されて以来、カリキュラム開発とは一線を画して、教師による観察に基づく教師の「省察」に着目するような教師の力量形成に主眼をおいた研究が蓄積されてきた。

(2) 研究の着想に至った経緯

こうした先行研究の成果が、授業の観察に基づく「教師の学習の場」としての授業研究についての知見を得るうえで示唆に富むものであることはいうまでもない。しかしながら、まず申請者が問題としたいのは、片上宗二が「戦後授業研究の現段階」(日本教育方法学会編『日本の授業研究 上巻』学文社、2009)において指摘しているように、世界的な注目とは裏腹に授業研究が形骸化し、教師の力量形成に寄与していないという批判がなされているという点である。さらに申請者が問題としたいのは、佐藤(1996)が指摘するように、子どもの観察の基づく授業研究が、一授業時間における出来事の詳細な分析がなされるものの、カリキュラム開発とは切り離されて研究がなされてきたという点である(佐藤学『カリキュラムの批評』世織書房、pp68-9)。そこで、本研究では現代的な課題を探るとともに、戦後初期に着目して研究を実施する。戦後初期においては授業研究とカリキュラム開発は不可分のものであり、子どもの観察を基盤とした授業研究とカリキュラム開発の関連性を検討できると考えたからである。戦後初期の授業研究については、開発したカリキュラムを公表・普及するためのものだったと評価されてきたが、史料による基礎的研究に基づく主張ではない(例えば、安彦忠彦「カリキュラム研究と授業研究」日本教育方法学会編『日本の授業研究 下巻』学文社、2009)。本研究は、子どもの観察や記録に基づく校内研究のレベルまで遡ることで、「カリキュラムの公表・普及のためのもの」というこれまでの授業研究の評価に一石を投ずるものである。

2. 研究の目的

本研究の目的は、教師によって書き残された授業内外での子どもに関する記録と、その記録に基づく各学校での研究について明らかにすることを通じて、子どもに関する記録が教師の力量形成やカリキュラム開発にどのような影響を及ぼしたのかを検討することである。具体的な研究目的は以下の3点である。戦後初期における子どもに関する記録の実践における位置づけ・形態・内容について探究する。子どもに関する記録に基づく教師による研究がカリキュラム開発や教師の意識や力量形成にどのような影響を及ぼしていたのかについて探究する。子どもに関する記録に基づく教師による研究に関する現代的な課題について探究する。

3. 研究の方法

上記の研究成果をもとに、子どもに関する観察と記録の形態や内容を整理・分析することを通じて、教師の力量形成やカリキュラム開発との関連性について探究する。具体的には以下の研究手順で調査・分析を進めていく。

(1) 戦後初期のカリキュラム開発の関係資料を収集し、それらの史料を基に、当時の教師による子どもの観察と記録の形態・内容を解明する。

(2) 子どもの観察と記録に基づく校内研究とカリキュラム開発や教師の意識や力量形成の関連性を明らかにする。

(3) 現在の校内研究を対象に、子どもに関する記録に基づく教師による研究に関する現代的な課題について探究する

4. 研究成果

(1) 戦後初期における子どもに関する記録に基づく教師による研究

学習の対象と子どもとの関係を把握する教師の専門性の自覚化

和歌山市立吹上小学校、加古川市立加古川小学校など戦後初期のカリキュラム改革や社会科教育実践が盛んに行われていた学校における校内研究会に関する史料などを収集・整理した。1947年版学習指導要領の時期における活動主義的な学習においては、子どもの興味や意欲にしたがって事実に知識を習得しており、子どもの認識は相互関連性のない知識の寄せ集めにならざるを得なかった実践事例を確認できた。そして、1951年版学習指導要領の時期においては、子どもの価値観をゆさぶり切実な問題意識を呼び起こすことで学習にまとまりを持たせようとする実践事例が確認できた。このような実践においては、学習の対象と子どもとの関係の把握することが教師の専門性として求められていた。この場合の関係の把握とは、学習の対象についての客観的知識がどれだけあるかということではなく、子どもにとって学習の対象がどのような存在なのかという価値観に迫ることを意味する。学習の対象に対する子どもの価値観と教師の意図は必ずしも一致しない。その矛盾点を学習の出発点として捉えることが教師の専門性として求められており、教師による子どもの観察や記録がその専門性を支える営みとして機能

していたことが示唆された。

コア・カリキュラム連盟におけるワークショップの影響

横手市立増田小学校、大分市立春日町小学校、高田市（現・上越市）立大手町小学校など戦後初期のカリキュラム改革を精力的に行っていた校内研究会に関する史料などを収集・整理した。1951年度の校内研究会に関する史料において、「単元に傾斜をかける」という、いわゆる「傾斜論」についての記述が見られた。傾斜論とは、コア・カリキュラム連盟の機関誌『カリキュラム』において論じられた単元構成論である。1951年1月から始まった「単元指導法」という馬場四郎、久保田浩、大村栄らの連載において言及されたものである。コア・カリキュラム連盟を中心とした単元構成論に関わる影響関係を確認することができた。また、1951年度の校内研究会に関する史料において、日常生活課程における子どもの観察・記録の方法として、「ガイダンス記録」という形式のものが見られた。「ガイダンス記録」とは、固有名をもつ子どもの一人ひとりの行動観察等の記録である。この記録を、日常生活課程にとどまらずに単元学習にも結びつけて生かすねらいがあったことが確認できた。個々の子どもの記録が生活の指導だけでなくカリキュラム改革の基盤としても位置づけられていたことが確認できた。

カリキュラム改革による学習の観察方法や教師間の協働性の変容

大分師範学校（大分大学）附属中学校、高岡町（現・宮崎市）立高岡小学校、隈府町（現・菊地市）立隈府小学校など戦後初期のカリキュラム改革を精力的に行っていた校内研究会に関する史料などを整理・分析した。1950年以降の史料において、コア・カリキュラムに対する批判がある中で、カリキュラム改編されたことに伴い、子どもの学習の観察や教師間の協働性のあり方にも影響を及ぼしたことが推察できる事例が見られた。例えば、大分師範学校（大分大学）附属中学校の『教育課程』（1950年改版）では、「共通課程」、「個別課程」、「相関教育課程」の三つの領域が見られた。特に、「相関教育課程」の運営上必要なこととして「1. 週間連絡表を作成すること / 2. 関連ある他教科の授業参観を出来るだけ進んで行いこと / 3. 生徒自身に対して指導目標を明示し理解させておくこと / 4. 教材の終末を出来るだけ次に対しての動機づけになるようにすること / 5. 生徒の興味と関心を適確に把握して連絡すること」などが挙げられている。また、教科カリキュラム 相関カリキュラム 共通課程と相関カリキュラムという段階を追って、カリキュラム改革が行われていた。共通課程では社会科を中心に複数の教科の機能を含んだ単元が構成されていた。さらに、相関カリキュラムでは、相関欄ないし備考欄に他教科との関連について明記されており、相関カリキュラムだけでなく共通課程においても、教科を越えた協働がなされていた可能性が示唆された。

問題解決学習における知識の位置づけと実践研究の質の検討

コア・カリキュラム連盟の機関誌『カリキュラム』を手がかりに、問題解決学習に関する実践研究についての検討を行った。コア・カリキュラム連盟の全国集会では「単元習作」という単元づくりのワークショップが実施されていた。例えば、単元「のりもの」（小学2年）の記録（『カリキュラム別冊 単元学習の研究』1952年6月）では、「予想される問題点」と、その問題を解決して活動を発展・充実させるための information としての知識が位置づけられていた。しかし、活動を通じて子どもはどのような認識を形成するのかという knowledge としての知識についての検討は十分になされていなかったことが明らかとなった。

コア・カリキュラム連盟の問題解決学習論の基盤となっていた代表的な実践研究は、全国集会での「単元習作」と機関誌『カリキュラム』における実践記録の検討であった。子どもの解決可能性と子どもの認識形成の2点から検討したところ、「単元習作」では児童の実態についての情報が乏しいため、については予見的に構想はできるものの実態に基づいた検討はなされていなかった。また、『カリキュラム』における実践記録の検討においては、個々の子どもの学習の様子を判別できる実践記録が少ないため（例えば「水害と市政」1953年11月号のように、個々の子どもの様子が部分的に読み取れる実践記録もある）、ともに、授業者が大まかに見取った子どもの様子に基づいて検討せざるを得ず、子どもの実態から十分に批判的に検討できたとはいえないことが明らかとなった。

以上のことから、コア・カリキュラム連盟の問題解決学習は、子どもの実態を十分に踏まえられなかったという「研究の質」の問題があり、「実践の質」の検討を十分にできなかった可能性が指摘できる。

(2) 子どもに関する記録に基づく教師による研究に関する現代的な課題

子どもの事実に基づく授業研究の諸問題を解明すべく、「当事者型授業研究」をキーワードに、現在の校内授業研究の事後検討会における教師の談話分析を行い、経年変化を追いながら、教師をエンパワーメントする授業研究の条件について探究した。さらに、子どもの事実に基づく授業研究の諸問題を解明すべく、「当事者型授業研究」を経験した教師のインタビューを対象に、3年間の経年変化を追いながら、教師をエンパワーメントする授業研究の条件について探究した。その結果、事後協議会が深まるためには、授業者の願いや意図の共有、子どもの姿の共有、

授業中の一場面への焦点化の3点が手立てとして有効であり、管理職や外部講師が研究に関わる場合においてもその3点を支援する姿勢で臨むことで、同僚間の自律的な学びが促進されることが示唆された。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 鹿毛雅治・藤本和久・大島崇	4. 巻 64(4)
2. 論文標題 「当事者型授業研究」の実践と評価	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 教育心理学研究	6. 最初と最後の頁 583-597
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） http://doi.org/10.5926/jjep.64.583	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 大島崇	4. 巻 798
2. 論文標題 子どもたちと学びを実現する教師のまなざし	5. 発行年 2015年
3. 雑誌名 生活教育	6. 最初と最後の頁 38-41
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計1件

1. 著者名 鹿毛雅治、藤本和久、秋田喜代美、大島崇、木原俊行、小林宏己、田上哲、田村学、奈須正裕、藤井千春	4. 発行年 2017年
2. 出版社 教育出版	5. 総ページ数 171
3. 書名 「授業研究」を創る	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----